

●特集●

第72回大会レポート (於：大妻女子大学)

日本保育学会第72回大会の特集として第175号の会報を発行します。今回の学会は連休中にもかかわらず全国各地から多くの方が参加し、好天に恵まれた2日間は正に保育の変革期にふさわしい学会であったと痛感しました。関東地区の開催ではありましたが、開催校である大妻女子大学の実行委員の先生方には本当にお世話になりました。

第72回大会を終えて

大会実行委員長 岡 健

2019年5月4日(土)・5日(日)、関東ブロックの主催で大妻女子大学千代田キャンパスにて日本保育学会第72回大会が開催されました。10連休中の実施ということもあって不安もありましたが、皆様方のおかげで大きな混乱もなく、無事に大会を終えることが出来ました。

発表件数は、研究発表913件、自主シンポジウム55件。両日の参加申込者の総数は3,579人でしたので、2日間で延べ7,000人近い方のご参加があったのだと思っております。改めまして感謝申し上げます。

今回のテーマは、「『新しさ』とは何かー保育におけるブリコラージュの視点ー」でした。テーマ設定の背景には、今、わが国の保育が大きな転換点を迎え、「保育の質の向上」や「保育の質の担保」問題について、「新しさ」を巡る諸言説、諸施策、諸制度等が大きな流れとなって動いていること。もし、この「新しさ」を志向する営みが、エンジニアリング的でシステムティックな営みへと収斂されれば、それは紋切り型で画一的な取り組みへと墮すことの危険性が絶えず孕まれるのではないか、という危惧があった点にあります。

改めて述べるまでもなく、質の向上が具体的に志向される個々の現場は、それぞれに多様な実態(地域〔含. 基礎自治体等行政機関〕、家庭・家族の状況、経験知も特性も異なる保育者、そして一人一人個性を有する子ども)を持ち、その中で各々の営みを生起させています。畢竟、そのそれぞれが、そのそれぞれの多様性に基づく必然性から質の「向上」を図っていかなければなりません。

「子どもの・保育者の・保護者の・人びとのいきる現実」に目を向け、多様性の原則やその豊かさに目を向けた上で「新しさ」とは何か、質の向上とは何か、を思索する場としたい。それが本大会への私たちの願いでした。

当日は、研究発表や自主シンポジウムはもとより、基調講演や学会各種委員会ならびに本大会実行委員会の企画シンポジウム等、いずれの会場も活発な議論や意見交流がなされていたとご報告頂いています。もし、額面通りそれを受け止めさせていただければ、大会開催にあたって私たちが基本原則とした一点目、すなわち「参加者による意見交流の場の確保」、については、何とかその責務を果たせたのではないかと安堵しております。

一方でもう一つの点、すなわち「会員諸氏の研究発表機会の保障」については、大会開催冒頭挨拶でもお話しした通り、数名の方が最初のプログラムから漏れ、後日、再度全会員にプログラムを発送するという事態を招きました。改めて会員の皆様には深くお詫び申し上げます。

ただ、こうした事態を招いた根本問題について、大会運営の立場から最後に一言申し上げさせて頂きます。

1,000件ものプログラムを大会2日間で実施することに伴う事務作業量は、想像を絶するものです。この事務作業を完遂する上で、発表諸氏におかれては、会費納入手続き等の期限厳守、申し込み題目と発表原稿題目の一致等の厳守は必要不可欠です。そしてまた、この事は発表される会員諸氏のご自覚・ご協力なしには不可能です。しかし現実には、必ずしもそうではない状況が少なくありません。そして残念なことに、こうした実態は、これまでの大会においても繰り返されてきました。

学会における会員は消費者ではないでしょうし、いわんや大会はサービスを受ける場所では無いと信じます。学会は会員による当事者運営が基本であることも言を俟たないと考えます。年々盛会となる本学会大会運営のあり方を巡り、どうぞ学会員諸氏のおかれましても、それぞれにご一考いただければと切に願っております。(感謝)

国際シンポジウム

(国際交流委員会・第72回大会実行委員会・OMEPI日本委員会共催)

国の教育課程の改定は、保育実践の場にもたらすか？

—ヌリ課程改定の内容・過程と特徴から考える—

佐久間 美智雄

2017年3月、日本では幼稚園教育要領、保育所保育指針及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領のいわゆる3法令の改定・改訂が行われた。近年諸外国において幼児教育・保育に関わる国家水準教育課程の見直しが行われており、私はその国際的な動向に関心があり、国際交流委員会・第72回大会実行委員会・OMEPI日本委員会共催企画である国際シンポジウムに参加させていただいた。制度・文化の違いの中で単純に比較することはできないが、諸外国の実践から我が国の保育と教育のあり方に示唆を得られると考える。

シンポジウムは、基調講演、指定討論、会場からの質疑の順で行われた。基調講演者は、韓国ヌリ課程の制定過程に長らく従事された白仙姫氏（Sun-Hee Baek, Ph.D.）で、韓国育児政策研究所所長であり、韓国幼児教育政策立案の中心的な立場の方で、お話をうかがう貴重な機会であった。

基調講演において、韓国の国家水準教育課程（ナショナル・カリキュラム）の改定過程とその内容は「1.ヌリ課程の政策的意味」、「2.中長期保育計画と幼児教育革新方案」、「3.ヌリ課程の改定の方向と内容（案）」、「4.期待される効果と政策上の課題」の4つの視点からヌリ課程とその改定について説明された。特に、ヌリ課程改定の方向と内容については、「現時点では確定ではない」としつつ、言及が各国の動向を知る上で貴重な情報であった。内容としては、韓国における5領域やあそびを中心とした教授法などとても興味深かった。また、全体を通して韓在熙氏（四天王寺大学短期大学部）の通訳や、丹羽孝氏（国際交流委員会）の的確な資料の翻訳は、とても分かりやすく理解するうえでの助けとなった。

指定討論では、清水陽子氏（九州産業大学）が「韓国標準保育課程と保育実践に学ぶ新しい保育の方向性」の題で韓国の標準保育課程とその保育実践について訪韓し、オリニジップや幼稚園、小学校、子育て支援センターにおける活動など訪韓で収集した資料から得た知見をもとに話題提供をされた。また、砂上史子氏（千葉大学）は「国の教育課程は、保育実践の場にもたらすか？—韓国ヌリ課程改定の内容・過程と構造から考える—」と題し日本の保育・幼児教育3法

令の改定・改訂と韓国「ヌリ課程」の改定に言及され共通の論点を話された。

会場からは、「教育の5領域」に関すること、「ヌリ課程」を進めるうえでの財政の問題（財政基盤や量的、質的にどう使うかなど）、「ヌリ課程」と「子どもの権利条約」の関係性など多くの質問が出されその関心の高さがうかがえた。

●Profile

佐久間 美智雄（さくま みちお）
東北文科大学短期大学部子ども学科 教授
施設実習、社会的養護、子育て支援を担当しており、海外の保育、幼児教育、子育て支援の実践にも関心がある。

自主シンポジウムJ-D-2 就学前教育と学校教育の接続に関する国際比較

—ニュージーランド、スウェーデン、フランスの調査から—

渡部 晃正

このシンポジウムでは、近年、注目されている就学前教育から学校教育への接続について、ニュージーランド、フランス、スウェーデンでの調査結果をもとに、3名の話題提供者により報告がなされた。

まず、飯野祐樹氏（兵庫教育大学）からは、「保育施設から小学校への移行過程に着目して」というタイトルで、ニュージーランドの特徴である個別就学の流れについての詳細な報告がなされた。同国では、5歳の誕生日を機に個別就学が認められており、就学6カ月前に小学校の選択、3カ月前に就学先が決定され、6週間前からは体験訪問が実施されているという。その過程において、保育施設が作成するポートフォリオ、ラーニング・ストーリー（5分から10分程度のエピソード記録）、子どもの評価資料などが用いられ、就学後の評価も実施されていることが紹介された。なお、2017年より一斉就学も認められるようになったとのことである。

次に、小笠原文氏（広島文化学園大学）からは、「保育学校の小学校化問題と幼小接続」というタイトルで、フランスの事例が報告された。3歳児の97.6%が就学する保育学校は、小学校とともに初等教育であり、義務教育の線上で捉えられていること、また、保育学校と小学校の教員資格は同一で、教員養成では小学校教育に重きが置かれていることが指摘された。保育学校で実施される年長児と小学校1年生児童の接続活動は、その内容・方法が保育学校に一任されているため、学

校により大きな違いがあるとのことであった。幼小連携に困難さは見えてこないが、保育学校の独自性・自律性について考える必要のあることが指摘された。

最後に、大野歩氏（山梨大学）からは、「子どもが語る『私』をつなぐ」というタイトルで、スウェーデンの就学前ナショナル・カリキュラム改定の動向と就学前学校から就学前クラスへの接続にかかわる手段（四者面談＝就学前学校教員、就学前クラス教員、保護者、子ども本人）、ツール（要録、個別ポートフォリオ）、情報（就学前学校における学びの様子、保護者・保育者の所見など）について、ヨーテボリの事例を示しつつ報告がなされた。同国では、移行の主体・主役である子どもの「声」を尊重し、個々の実態に即した接続が図られているとの指摘がなされた。

指定討論者の一見真理子氏（国立教育政策研究所）からは、わが国の幼保無償化を控え、今後、就学前教育の成果を見えるかたちにしなければならないとの指摘があり、この点に関する各国の状況把握の必要性が述べられた。また、「保育者の労働環境の国際比較」に関する話題なども提供された。なお、企画・司会の七木田敦氏（広島大学）と岡花祈一郎氏（琉球大学）を交えた全体討論では、「比較研究をする意味」にまで議論は及んだ。今回紹介された3カ国の事例は、就学前教育から学校教育への接続関係を考える上で、いずれも示唆に富むものであった。

●Profile

渡部 晃正（わたなべ てるまさ）
東京家政大学児童学科 准教授
教育・保育制度に関する研究を進めてきた。多文化共生社会に向けた教育・保育施策に関心があり、園や行政機関を対象とした調査も実施している。

ポスター発表P-C-3 障害児保育・障害のある子どもを含む保育2

今村 幸子

ポスター発表P-C-3「障害児保育・障害のある子どもを含む保育」の中からいくつか報告させていただく。

木曾陽子氏（大阪府立大学）らは、インクルーシブ保育に関する保育士の意識調査において、9割以上の保育士が「支援の必要な子どもが自分の保育を見直す機会になる」また、「特別支援や相談支援について勉強したい」と答えたことから、支援の必要な子の存在についてポジティブに捉えている様子を明らかにした。しかし、園全体での支援や研修の機会について不十分

さを感じているということも明らかにされていた。

櫻井貴大氏（岡崎女子短期大学）は、加配保育者の専門性に着目し、加配保育者を安全基地として、それを起点に「日常生活共有他児」に働きかけ、相互意識関係へとつなぎ、更にその関係を起点として遊び内の「直接他児意識」が育っていくプロセスを明らかにしていた。

熊谷和可佐氏（学校法人桔梗学園認定こども園さきょう幼稚園）らは、描写活動を主としたワークプリント活用の試みにより、園内支援委員会で年齢相応のできることを共通認識し、気になる子への具体的支援について園全体としての基準を持って取り組むことにつながっていた。

要支援児にとって良い保育は、他のすべての子どもにとっても良い保育にもつながると考える。今回の研究発表では、保育者の意識や専門性、園の支援体制等への丁寧な調査、分析から日頃の保育を見直し、質を高めるための示唆が得られ、大変貴重な機会であった。

●Profile

今村 幸子（いまむら さちこ）
学校法人四元学園認定こども園はなぶさ幼稚園
特別な配慮を必要とする子どもの保育に関する他職種連携や園内連携のあり方について、また、保育者のスキルアップのための研修等について興味関心をもっている。

口頭発表K-B-19 幼保一体化・幼保小連携など1

天願 順優

今大会のキーワードである「ブリコラージュの視点」が示唆しているように、保育現場や保育政策は多様な実態の中で改善や改革を模索していくことが求められている。そのような課題を乗り越えていくために、幼保一体化・保幼小連携においては、どのような実践や研究が行われているのかを学びたいと思い、口頭発表K-B-19の分科会に参加した。

まず、川口めぐみ氏（関西保育福祉専門学校）らは、認定こども園への移行において、1号認定児と2号認定児の保育経験の違いや人間関係の固定化が生じていることを指摘した。そのために、①子どもが全員で一日を振り返る時間や場の設定と、②子どもが年齢を超えて共に学び合える環境の意図的な工夫を報告した。

次に、矢崎桂一郎氏（東京大学大学院生）は、スウェーデンの幼小連携に関して、地方自治体が果たす政策

的役割を報告した。その中で、マルメ市とリンショーピン市の接続期ガイドラインを分析し、共通性と固有性の紹介があった。特に印象的だったのは、両自治体とも移行期に、一人ひとりの対話を設ける時間を大切にしているとのことである。

そして、本田祐吾氏・富田京子氏（両・お茶の水女子大学附属小学校）は、研究成果の一つとしてサークル対話をもとにした1年生の学習を報告した。例えば、国語の授業で、指を包帯で巻いている写真を見て子どもが「フランクフルト」みたいと見立てたことから広がる比喩表現と「ずれ」を埋め合う中で生じる語彙の獲得など、言葉を共同推敲していく過程が報告された。

また、本田俊章氏（つくの幼稚園）・渡辺英則氏（港北幼稚園）は、横浜市における保幼小接続について現状と課題を報告した。横浜では、先進的にスタートカリキュラムに取り組む小学校がある一方で、実際には、教師主導の学校文化が残っている所もあるという。そのため、保幼小の連携は、縦断的に教育を捉える必要があるとの報告であった。

さらに、筆者と岡花祈一郎氏（琉球大学）は、子どもは「小学生になる」ことをどう捉えているのかを研究報告した。①身近な経験を手がかりに情動的に「みたてながら」、学校の文化を意味づけている。②期待と不安の間で揺らぎながら、新たな「小学生の自分」を作りあげようとしていることを報告した。

最後に、竹田清美氏は、「言語発達の成長とコミュニケーションの一考察—乳幼児の言語発達の関わりから、保育園・幼稚園・特別支援学校を含む小学校教諭など38年間の経験から考察を追求する—」についての報告があった。

以上の研究発表を受け、全体討論では次のような課題が指摘された。第一に、小学校教育の先取りのな幼児教育や子どもの主体性を阻害するような小学校教育が未だ見受けられる。第二に、幼児教育と小学校教育の連携がとりにくい現状があるとの意見があった。また、筆者が在籍している沖縄県の園では、横浜市の幼小接続とは違った独自の課題があると考えられる。

従って、幼保一体化・幼保小連携において、それぞれの専門性を尊重しながらも枠を超えた接続の質の議論が求められている一方で、様々な地域の現状や課題を含めた接続の在り方を検討していく必要があると感じた。

●Profile

天願 順優（てんがん じゅんゆう）
琉球大学大学院教育学研究科 修士課程2年
沖縄県うるま市社会福祉法人勇翔福祉会コスモストーリー保育園 園長
保幼小接続。特に、幼児教育から小学校教育への移行期において子どもの自己形成過程に関心がある。

公開保育

—保育の質を考える 保育の現場で学ぶということ—

永井 久美子

今年の2月から3月にかけて、「日本保育学会第72回大会」が企画する、公開保育（全国10か所）の内、2か所（中部ブロック 幼保連携型認定こども園 寺子屋大の木・近畿ブロック 幼保連携型認定こども園 はまようちえん）に参加させていただきました。今回は全国のプロックにまたがり、時期がずらされていたこともあり、複数の園への参加が叶いました。また、当日は、保育の公開のみならず、各園での研修の様子についても参加・公開させていただきました。

公開保育のテーマは、「保育の質を考える 保育の現場で学ぶということ」でした。そこで、園の先生方に、どのような思いで臨まれたかを伺いました。すると、「日常のありのままの保育を見てもらおう。」「自園の園内研修をシェアする機会に恵まれたので、ご参加の先生方から意見をいただき、園を良くしていこう。」「ご参加される先生方にも楽しんでもらおう。」等、前向きな思いを語ってくださいました。今回は、先生方（保育者・研究者等）から、「子どものどのような育ちに繋がっているか」等、自園の課題や良さがみつきり、今後の学びに繋がりたいとの意見がありました。

私は、これらの園での研修の様子から、「保育を自由に語り合う風土」が形成されており、そこには、経験の浅い先生方も積極的に保育を語ることができる環境があると感じました。これは、風通しの良い職員集団の土壌があることで、はじめて「子どもの学びをどう捉えるか」を深めることに繋がっていくのだと思います。「職員相互のより良い関係性」と「学び続ける職員集団」がある等の共通点が多くありました。また、教育面や施設面の工夫や取り組み、その他の地域との連携・子育て支援の取り組み等、保育の場にふさわしい環境づくりを目指されています。リーダーは、職員集団に注意深く関わり、コミュニケーションを滑らかにする事を大切にされ、「保育の質を高めるチームづくり」に果敢に挑んでおられるのだと感じました。

今回は日程の選択肢が多く、開催場所が広範囲であった事から、私にとって普段お目にかかる事のできない先生方との交流の機会がありました。さらに、開催校の岡建実行委員長・小川清実先生のご参加も

あり、保育を見学しながら意見交換をさせていただけた事も貴重な経験となりました。公開保育・研修を通して、参加者にとっても、居心地の良さを感じさせてくれる空間となり、どっぷりと保育に浸れる時間となりました。また、参加者への食のおもてなし（園のピザ釜で焼いてくれたピザ・焼き芋、一杯一杯丁寧に淹れてくれた珈琲・手作りケーキ等）は、緊張を解きほぐし、心をあたたかく豊かな気持ちにさせてくださいました。

今回の参加を通して、これらの園の職員集団は、「学び続ける人」であり、大人の保育の見方を柔軟に変化させ、子どもを肯定的に見る中で、大人もお互い肯定的に関わる関係である事を体感させていただきました。この度は、貴重な学びの機会をいただき、感謝申し上げます。また、訪問させていただけると幸いです。

●Profile

永井 久美子（ながい くみこ）

神戸女子短期大学幼児教育学科 准教授

専門は、乳児保育、保育学。

近年の研究テーマは、「養成から現職を見通した乳児保育の質の向上について」「保育職におけるバーンアウトの影響要因について」。